種名	イ　ヌ　ビ　エ Ecbinocbloa crus-galli 				
分類	被子植物単子葉植物網イネ科	俗称	サルビエ、ノビエ、ヒエ	生活型	1年草、叢生型
分布	世界の熱帯から暖帯にかけて広く分布する。日本では本州から沖縄、小笠原にかけて分布している。				
形態	基部がやや赤みを帯びた分枝する粗大な1年生草本。変異が著しく、いろいろな型がある。 根：根は単位。 茎：茎は紫褐色で平たくて平滑であり、高さ 60～120 cmになる。根元から枝分かれし、上部は直立する。 葉：葉は広線形で長さ 30～50 cm、幅 0.7～2cmで先はしだいに尖る。葉は無毛で縁はざらつくが、あまり堅くならない。葉鞘は茎を抱く。葉舌がまったくないのが特徴である。 花：花期は7～10 月。花穂は茎の先に着き、円錐形で長さ 10～25 cm、小穂がやや一方に偏って密についた、長さ3～5cmの枝を多数つける。 小穂は卵形で通常紫褐色で毛があり、長さは3～4mm。芒は2～3mmと短い。 果実：果実は広卵状楕円形で乳褐色の穎果である。				
類似種	ケイヌビエはイヌビエに似ているが、小穂が赤紫色を帯び、多くは長い剛毛をもつ。芒が長く2～3.5 cmある。茎は紫褐色で株になり、草丈も 80～120 cmと大きい。イヌビエとの間にいろいろな中間型が見られる。 タイヌビエは水田によく生える高さ 40～90 cmのヒエ類で、分蘖して株になる。節はやや高く、葉の縁には細かい鋸歯が密にあってざらざらする。上記の2種と異なり、茎も穂も淡緑色である。ヒエ類のなかでは最もイネに似ている。 ヒメタイヌビエはタイヌビエに似るが、茎・葉ともより小型で繊細である。茎は淡緑色で株になり、高さ 50 cm内外、葉は細長い線形、穂も小型で淡緑色、小穂がまばらにつく。				
生息場所	オオクサキビとともに、造成地など人工改変の進んだ土地に最初に侵入する植物の1つ。 河川では中流から下流にかけての中水敷に多い。そのほか、水田、荒れ地などに普通に生育し、広い群落をつくる。				
繁殖	繁殖は種子で行なう。花期は7～10 月。結実して穎果をつくる。種子は植物体の周辺に落下するほか、鳥類等の糞とともに他所に落下する。造成地などに最初に侵入する植物の1つで、夏頃までに急速に成長し 80～100 cmになるが、翌年からは急減して他の植生に移行することが多い。畑や水田の害草となる。				
他生物との関係	種子は小鳥などの餌として利用される。				
配慮のポイント	先駆性の1年生植物で、特に配慮すべきことはない。				
トピック					
その他					
引用文献：『川の生物図鑑』を改変					